

ヤマトクビキレ *Truncatella pfeifferi* Martens

【選定理由】

本種は、内湾からやや外洋に面した内湾の塩性湿地の高潮線付近に発達したヨシ原内や転石下に生息する。県内ではヨシ原湿地やその上部へ連続する陸上植生は、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。特に塩性湿地の陸上に近い部分は、護岸工事などで破壊されやすい。近年の三河湾島嶼域の調査でも、飛沫帯より上部の環境が保全された狭い範囲のみで生息が確認されたが、県内での本種の生息場所は非常に少なく、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



西尾市佐久島, 2017年6月25日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約7mmの小型種。殻は淡赤褐色の円筒形で重厚。成貝では殻口が肥厚し、初期の螺塔が失われる。多くの個体では殻表に強い縦肋を持つが、螺肋が全くない個体まで個体変異がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)では1カ所生息地があった。その後、渥美半島先端部の三河湾側に1カ所生息地を確認した。木村・木村(1999)で報告した生息地は非常に狭い範囲であったが、2005年頃親水護岸工事で完全に消失し、その付近でも全く生息が確認できない。その後の調査で三河湾内では本種の棲息地は点在していることが明らかになったが、多くの棲息地は1m²にも満たない範囲内に限られていた。最も多産した佐久島においても、本種の棲息場所は数m²にも満たない限定的な範囲内であった(早瀬・木村, 2020)。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島。国内では北海道南部から種子島まで分布する。国内に分布する本科には近年未記載種が多数存在する事が知られており(福田・他, 2017)、分類学的な再検討に伴い本種の分布域も見直される可能性がある。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生にかけての打ち上げ物の下や転石下に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

早瀬・木村(2020)で、佐久島より本種に近似した *Truncatella* sp. ハクボククビキレ(絶滅危惧ⅠB類)が記録された。

【引用文献】

福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科(新生腹足類:クビキレガイ上科)の再検討に向けて. *Molluscan Diversity* 5 (1-2): 33-77.

早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. *ちりぼたん*, 50 (1): 33-79.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. *日本ベントス学会誌*, 54: 44-56.

(木村昭一)